

さけ・ます増殖振興事業調査 要 約

吉田 秀雄・田村 真通

本調査は、さけ資源の効率的増大を図ることを目的として、県漁業振興課・内水面水産試験場・水産試験場・水産増殖センターが各調査項目を分担し、59年に引き続き実施したものである。当所は、回帰率向上調査・親魚回遊経路調査を担当した。なお、詳細については、「昭和59・60年度さけ・ます増殖振興事業調査報告書」(昭和62年3月、青森県)で報告した。

1 回帰率向上調査

a) 標識放流魚の追跡調査

- 昭和60年4月5日、野辺地川から尾鳍上葉切除したシロサケ稚魚10万尾を放流した。
- 放流河川河口域でのタモ網・小型定置網への混獲魚の採集により、57尾の標識魚が採捕された。

b) 陸奥湾の海洋環境調査

- 浅海定線調査等、既往資料をとりまとめた。
- シロサケ稚魚滞泳期の4月から6月までの水温は、ほぼ平年並に、塩分は31.80~33.96%の範囲で推移した。
- 動物プランクトンの出現状況は、4~7月まで橈脚類が卓越していた。出現个体数を59年と比較すると60年が明らかに多い状態であった。

以上、湾内へ放流された稚魚の湾外移動は、5月下旬(湾内水温10~11℃台)を中心に行なわれ、標識魚の移動・成長と放流魚の湾外移動時期および、陸奥湾海洋環境調査結果から考えて、陸奥湾内におけるシロサケ稚魚の放流適期を、3月下旬~4月上旬と推定した。

2 親魚回遊経路調査

a) 放流河川における調査

- 野辺地川への回帰は、9月下旬から2月上旬までみられ、計1,322尾であった。年齢組成は、4年魚68%、5年魚22%、3年魚9%、6年魚1%で、5年魚の割合が例年に比べ多く、3年魚が少なかった。成熟状況は、59年と同様に殆んどがブナ毛であった。

b) 陸奥湾口部における調査

- 59年と同様に、佐井村牛滝において水揚魚への湾内起源標識魚の混入率を求めた。
- 混入率は、11月0.2%、12月0.1%であった。